

むかしむかし、世界がまぶしくみえたころ、ピルの掃除夫をやりながら、一大小説を書こうとしていたおじさんが、わたしを益ヶ崎に連れてってくれました。これは犬のやつかもしれないぞ、とおどかさながら、一杯飲みでホルモン喰べていたら、横のおじさんが酒をふるまってくれて、お互い気やすくなったところで、仁義をきられたことがあったのです——あんたを見込んでたのみある。高校へいっとるわしの娘がぐれかけとるんや、々のわ。なんとかしてくれんか。娘がかわいいんや。おひかえなすってではじまる自己紹介を受けて、映画みたいやな、とおどろいた上にこのたのみ、はたちになるかならんかくらいの若輩のわたしがおたついている様子が見像できるでしょう。場所は三角公園。おじさんは松田組の組員とっていました。おじさんは公園の一隅にかたまって、なにやら熱中している男たちるところにわたしを連れこみました。男たちが熱中していたのは、サイコロと空きカンを使つての「四五一(しごいち)」で、万と

いう額の金にとびかりのです。組のおじさんにいいからやってみな、といわれて好気心まんまん、みよりみまねで振つたものの、負けとあいました。さんねんさんねん、とハッゴ酒にいと、ぶらぶら歩いてみると、さっきの輪の中にいた兄さんが寄つてきて、寒いやろといつて、自分の着ていたジャンパーを肩からかけてくれたのです。たき火をみつけてあつたまっていますと、どこからかもどつてきたその兄さん、やつぱし返してな、とジャンパーを取りにきました。

その夜からわたしは益ヶ崎に似さくな親愛感を抱くよりになりました。卒直なままに生きるひとびとの、それゆえのさびしさ、苛酷さ、自由な気分がうづまいたり、くぐもつたりしている場所。ふつりの価値観が無効になる場所。名前も知らずとも、気があえばすぐ仲良くなれる。だれかれとコーヒーを飲みにいったり、新世界や天王寺公園を散歩したりするひとときはわたしの楽しみのひとつです。道端の鉄サタにたきつけられ、機動隊員

のコン棒で頭を割られ、血へどをはいて倒れた人を見た夜もあります。機動隊員のなぐりよりは、人を人ともおもわぬむごいもので、デモ隊への弾圧ぶりをはるかにしのぐすさまじいものでした。冤獄の友人の地下足袋にぶらさがるようにして、とい伝いに知りあいの留守部屋に上りこんだ夜もありました。

X

X

さて、またもや病人づらとなつたわたし、両手に荷物ぶらさげて、地下鉄動物園前の階段を上がると、まるで家出娘？みたいなため息ついていたので、ネエちゃんどどいくんや、と声かけたのは、ねづみ色の作業帽をかぶつたオジサンでした。痛む背中に手をあてて、とても男に逢いにゆくなんてふりじゃないので、センターの病院までよ、とほんとうのことをいって、わたしとオジサンはならんで歩きはじめました。ならばとオジサンは小柄なわたしとおなじくらしいの背丈けにみえました。重いやろ、といつて荷物のひとつをオジサンは持ちました。そして、あの病院の院長はんはエエひとやで、とりれしそりに言ひのです。「院長はん」のことはわたしもすこりし知っていました。豪放らしいくノロマンチストで益の赤ひげと呼ばれていて、以前、わたしが倒れたときに、益の赤ひげ先生のところへ運ばるか、とだれかが言つて

いたからです。

オジサンは病院とは馴染みらしく、そこいらじゅうの人たちと心やすくあいさつを交しながら、五階の受付まで送つてくれました。「だいじょうぶか」と念をおし、だいじょうぶよ、ありがと、と返すと、ニコニコ顔でエレベーターに消えました。正午でした。オジサンはこれからどんな午後をすごすのでしょ。

病室には、かわいいコップや日用品、それにバラとカーネーションの美しい花束が届いていました。昨夜、出たぎからもどつたばかりの、K君からの差し入れてした一瞬、これらの品々がここに届くまでのいろんな順序一寒風にさらされてのきつい仕事や、花束でたちどまってあれこれと花をえらんでいる様子などを想い、心こもつた歓迎をうれしくかみしめていたので。わたしは、レバノン南部のキャンプで、パレスチナのこどもたちがちいさな手に花をかかけて歓迎してくれた夏の日をおもいだしていました。

X

X

きよねんの夏、一念突起して苦勞の末に、ほんとうに、はじめて、夢にみた河を渡りました。行先きはアラブ。

三十年におよぶ不当な追放と破壊、虐殺の地獄からたちあがり、いつさいの差別から人間を解放する寛容と愛の革命をたたかうパレスチナのひとびとに会いにいったのです。そこでわたしは、力づくでおおらかな心で、いたわりあい、はげましあつてたたかうたくさんのひとびとに出会いました。国境にちかい南部の前線には、イスラエルの空爆や右翼の砲撃で、めちやくちやに破壊された村々があり、ふみとどまつてたたかうひとびとは、トタン屋根と石でできたりすぐらい箱のような部屋に住んでいました。前線のゲリラ基地のコマンドたちは、オリブの樹の下で、戦闘服のまま銃と添い寝します。がわのとれたオンボロのマットを地面に敷いて、毛布をかぶつての仮眠です。砲撃がくると（それはいつも敵ーイスラエルと右翼の基地ーから始まる）無線機が活躍し、すばやく陣型が組まれます。コマンドたちは、慢性的な寝不足で、ふとる間がないよ、とユーモラスな身ぶりでごぼしてました。シオニストとファシストの近代兵器に二十四時間ねらわれ、肉親や同志たちの死は絶えません。そのながいげしい悲痛を勇氣にかえ、人間の尊厳と希望の回復を熱烈にひめたひとびとの目は、あたたかて人なつっこく、どこでも、だれに会つても、そのままさしから、人をそこない傷つけてしまふようなひやかさや

どうまんを感じたことは一度だつてありませんでした。かなしみをひめたやさしさ、快活さ、真剣さ、そしてあかるい友好心にあふれたひとびとから、わたしは友と呼ばれ、同志とよばれ、きよりだいよ、と呼ばれたのです。家父長制こそすたれつつあつても、血縁関係を優先させる習慣化した思想と構造にすつぽり埋まつた日本人のくらしと人間関係の中で、家なし、親なしの辛酸をさんざん味わつてきたわたしにとって、パレスチナとの出会いは、自然な開放感にみちたのびやかな活き活きとしたものでありました。

いちど、こんな質問をされたことがあります。「ところで、ここまてくるのにお金がいぶんかかったことだろう。どうしてこれたのかね」 たづねたのは、二人の幼な子を抱えたベンキ取人のダンナで、わたしの詩を読んで、あなたはパレスチナ人だ！と声をあげた人です。「たくさんの友人がおカネを集めてくれたのでこれたのです」というと、ダンナは充分になつとくした様子で、何杯もシャーイ（紅茶）をついでくれながら、わたしはあなたがいのお歌をうたいたいあいをした。まっくろい髪をきれいに結つたオクサンが、「あなたのタニでいちばんの歌手はだれ」とききます。「美空ひばりというひとよ」というと、「ここではトタンの愚根に落ちる雨が最高の

歌い手よ」ときました。ハッハッハッとみんなで大笑い。一本とられた次第です。

キャンプでの、いちばんの仲良しは少女たちでした。

褐色の肌にしつ黒のおおきな夜のような瞳をした少女は、かいかしくこどもたちの世話をし、戦士たちの食事をつくりまします。少女はわたしたちの喉をひっぱつて、キャンプのあちこちを連れ歩くのでした。手製のブランコのあちこちを遊び場。爆撃で石の山となった家を指さして「イスラエル！」身ぶり手ぶりをませあわせてのやりとりなんだけど、姉妹みたいな感情が行ききして、心はピンピン通じるのです。わたしは都会への出稼ぎから帰省した長女みたいに、弟妹や両親がくつろぐ一坪ほどの庭先きにすわりこみ、ニコニコと時をすごし、写真のとりっこをしたのでした。少女の父親は片方の目を失って義眼を入れていました。少女はときどき「おやつ」を紙にくるんでくれました。「おやつ」はアラブの甘い焼き菓子であつたり、塩ゆでした緑色の豆であつたりしました。わたしは出発前に朝鮮人の友から「せんべつ」にもあつた白い木綿のシャツを少女にあげました。シャツは少女のほつそりとしたからだにびつたりで、とてもよく似あつたので、わたしたちははしゃいでよろこびあいました。

少女たちの話をもうひとつします。

キャンプ・デーピットに抗議する大デモに同行したときのことです。髪をふりみだし、汗だくとなつてシュプレヒコールを先導していた女リーダーが、わたしをみつけるやいなやものすごい力で抱きしめ、音をたててキスしたのです。女同志でキスしたことはあるけど、あんな派手なのははじめてで、面くらつてゐるわたしを隊列の少女たちがとりまきました。そのときわたしは、ラクダの皮のカバン（ベイルートの裏通で格安で買ったもの）を肩にかけていましたが、少女たちは、どこからきたのとか、なににきたの、とかの職務質問じみたことはいっさいきかずに、「あんたはやせつぼらでカバンが重そう。持つてあげるわ」というのが最初の言葉で、ぼんとカバンを肩からはずしてしまつたのです。ひとりはどこからかピーナツとか度ちやの種をにぎつてきて、わたしの手にのせました。アラビヤ語のシュプレヒコールがうまく発音できなくて、わたしはもっぱら豆をかじつていたのです。対空高射砲をのせたジープを先頭に、デモはサイダの町の大通りに向いました。四ツ辻には戦車がかまえ、空からはイスラエルの戦闘機の威かく爆撃の音がドドーンとひびいていました。